
東方スキマ合体！

猫田犬次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方スキマ合体！

【Zコード】

N7327M

【作者名】

猫田犬次郎

【あらすじ】

妖怪だけを襲つた突然の『異変』！ ある妖怪は倒れ、ある妖怪は凶暴化した！ 解決できるのは残された人間たちだけ！ そして始まる人間組 vs 妖怪組！ 崩壊するスペルカードルール！ 八雲紫の新技「スキマ合体」によって始まる肉弾戦！ 死にゆく萃香を救おうとする靈夢！ スキマ合体によってパワーアップした魔理沙・咲夜・妖夢の妖怪退治！ 上海と蓬莱の恋模様はいかに！？ やがて解禁される八雲紫の真の実力！ 果たして人間は生き残れるのか！？ 妖怪は救われるのか！？ 幻想郷は平和を取り戻せるのか！？

? 「メテイーです。4あたりからいい感じになり始め、6から本調子。たぶん。あと感想はコーナーじゃなくても書けます。小説修行のために書いてるのでリクエストは大体反映させると思います。「エロシーンぶち込め！」と言われたら、たぶんぶち込んでいます。

何がが開いた。

それは扉といつにはあまりに大きく、門といつにはあまりに歪だつた。

暗い暗いその奥からは、不穏なものが流れ込んでくる。
それに触れたある者は理性を失い、ある者は生命力を失つた。
そしてある者は……

1 異変

「うう、きのう萃香と飲みすぎた……」

博麗靈夢の目覚めはあまり気持ちの良いものではなかつた。一日酔いといつほどではなかつたが、氣だるい朝だつた。居間で布団もなしに雑魚寝してしまつたせいもあるだひつ。

昨晩酒を酌み交わした萃香もすぐ横で寝ていた。なぜか萃香はちゃんと布団にくるまつていた。

「ほら！ タツサと起きな」

靈夢が声をかけるが、ぴくりとも動かなかつた。

「全く、暢気なものね。朝だよ、ほら」

靈夢は萃香を足で小突いた……つもりだつたがその際にバランスを崩し、かなり強く蹴つてしまつた。

「あ、やば」

それでも反応はなかつた。

この鬼が一日酔い？ 珍しい。何か『異変』でも起こる予兆かし

靈夢は萃香を放つておいて身支度をし、わざと博麗神社の掃除

を済ませた。

「私の靈力じや何も感知できなけれど、何かがおかしい気がする。うん。そう囁くのよ、私のゴースト的な何かが……」

再び萃香のところへ行くと、案の定さつきのままだ。

「またたく、いい加減起きなさい！」

そう言つて靈夢が布団をまくり上げると、やけには青白い顔の萃香がいた。

「萃香！ どうしたの萃香！」

体温は低く、脈拍は弱い。ひどく衰弱しているようだつた。

「これは単なる一日酔いじやない。靈夢はやはり『異変』の匂いを嗅ぎ取つた。

「靈夢！」

白らを呼ぶ声に振り返ると、空間にぱつくりと開いた隙間から八ヶ雲紫やが顔を覗かせてた。

「早く萃香を連れてこつちへ来て！」

靈夢は言われるままに萃香を抱え、急いで隙間の中へ入り込んだ。すると即座に隙間が閉じ、つい先ほどまでいた畳の居間とは一変、そこには得体の知れないスキマ空間が広がつていた。

「ふう……これだけでも一苦労」

紫はひどく疲れた様子だつた。

「ねえ一体どうなつてるの？ 萃香は大丈夫なの？」

「ちょっと待つて、いま診てみるから」

紫は寝かされた萃香の体を調べ始めた。

「他にも同じ人が……」

「この広いスキマ空間に、萃香と同じように寝かされた者が何人もいることに靈夢は気が付いた。

「そう、これは『異変』よ」

「これはちょっとやそつとの『異変』ではないかもしない。靈夢は紫の目を見て思った。

「大抵はここへ来て安静にしていれば大丈夫だけど、まづいわね……」

…

「萃香も大丈夫なんでしょう？」

「不運が重なったというか……元から体調が悪かったのかも知れな
いわ」

あれ、やつぱり一日酔い？ 霊夢は心の中でつぶやいた。

「それに、何者かの攻撃を受けてる。ほら、腹部にこんなあざが
ギクリ。靈夢に罪悪感が芽生えた。

「ひ、ひどい奴もいるもんだなあ。だ、誰がこんなことを、はは、
でもすぐ治るんでしょう？」

「いや……」

「え？」

紫の悲しそうな顔を見て、靈夢は初めて事態の深刻さがわかり始
めた。しかし、わからないことが多すぎる。

「ねえ何なの？ 一体どうなってるのよ！」

「そうね、まず……いま幻想郷で起こっていることを説明するわ」
紫は幻想郷に充満しつつある『異変』について、靈夢に説明し始
めた。

「何かきっかけはわからないけど、幻想郷と異世界が繋がってし
まつたのよ。おそらく幻想郷のどこかに空間の穴を空けられたみた
い」

幻想郷のことをについてはかなり詳しいと自負する靈夢も、さすが
にその情報は掴んでいなかつた。

「でも幻想郷の結界は破られてないわね」
振り向いて大鳥居を確認しようとしたが、そこにあるのはスキマ
空間だけだった。

「そ、内側から侵入されたのよ。穴を見つけ次第早急に塞ぐつも
り」

それほどのことをなぜ自分は気づかなかつたのか。靈夢は不思議
に思つた。

「で、その異世界つていうのは？」

「その穴から出てきて暴れてる魔物から判断すると、たぶん魔界に
近いものだと思う。だけど、魔界よりもずっと次元が低い。理性も
何もない世界だわ」

そいつはたちが悪いな。靈夢は苦い顔をしていた。

「その暴れてる魔物つてのが問題なわけね」

「いいえ違うわ。それは幻想郷の人間にかかればすぐに駆除できる
わ」

「じゃあ何が」

靈夢の表情は疑惑を表していたが、焦りからくる苛立ちが見え隠
れしていた。

「そこから流れてくる妖気が幻想郷に充満していること、それが問
題なのよ」

「妖気なんていつだつて充満してるじゃない、幻想郷には」

「確かにそうだけど、それとは少し違う妖気。理性を失わせ、暴力
を欲する妖気。とはいえたともと幻想郷に充満していた妖気と性質
は同じ。だからあなたは普段との違いに気が付かなかつた」

確かにそうだった。

靈夢は何かしらの違和感を抱いていた。だが自らの靈力を周囲に
張り巡らせて異質なものは感知できなかつたのだ。気づくべきだ
つたのは同質ものの『異変』であつた。

早い段階でもつと踏み込んだ調査をしていれば萃香がこうなるこ
ともなかつたと思うと、歯痒かつた。そして自らの力の至らなさを
感じ、悔しかつた。

「ごめんなさい……」

「いえ、しょうがないわ。それより問題は異世界の妖気と幻想郷の

「それはどういうこと?」

紫は手を靈夢のほうへ向けた。

「たとえば人間ならまず肉体があり、それがエネルギーを生産して肉体を動かし、付加的な靈力でもって能力を使つてゐる」

次にその手を紫自身に向けた。

「でも妖怪は違う。妖気によつて肉体を動かし、妖気によつて能力を使うの。全ての生命活動の根幹に妖氣があるの」

妖怪の生命力が物理的な肉体に依存していなることは、度重なる戦いにより靈夢も実感を伴つて理解していた。

「だから自分の纏う妖気を異世界の妖気に干渉されるとね、妖怪の存在自体に影響が出てしまうのよ」

「で、どうなるの?」

「もう幻想郷では異世界の妖気に干渉されてしまった妖怪が正氣を失い、凶暴化し始めているわ。干渉を拒めるほどの妖怪も、自分の妖気の流れを止めているので生命力自体が希薄になり、瀕死の状態がほとんど」

「それで萃香も……」

「ええ。だから私もこの空間の外には出られないし他の場所じゃスキマを作ることすらできないの」

「他の場所?」

「そう、博麗神社以外の場所は駄目なの。博麗神社は結界の起点。つまり、靈力が常にここから流れ出でているから、靈力や妖氣だとか、そういうた靈的なエネルギーの流れの上流にあたるのよ。そのせいでも幻想郷ではここが一番異世界の妖気が薄いの。とはいえ萃香が倒れるほどだから危険はあるけどね」

靈夢は大体の状況を把握できただが、やはり萃香のことが気になつた。

「萃香は大丈夫なんでしょうね?」

萃香の顔を見ると、さつきより弱つてゐるような気がした。鬼ら

しい強い生命力は感じられず、そこにいるのは儚げな少女だった。
大丈夫だ、大丈夫なんだ。靈夢は心の中で何度もつぶやいていた
が、自分の頬に流れるを感じ、それは自分に言い聞かせる嘘に
過ぎないと気づいた。

ただ萃香を見ているだけなのに、涙が止まらないのだ。靈夢の鋭
い勘は残酷な答えしか出さなかつた。

「普通は弱りすぎてなればここで安静している限り大丈夫だけど、
萃香は衰弱がひどいわ。異世界の妖気による干渉がなくなつても自
力で回復する保証はできない」

望んでもいない勘が靈夢の意思に反し働き続ける。

それを突き破るためにも、あえて言葉に出した。

「それって、死ぬかもしれないってことよね……」

「ええ正直に言えばそうよ。それも低くない確率で」

靈夢とは対照的に紫は冷静だつた。それは靈夢の目には余裕とし
て映つた。紫の冷たい態度にすらすがり付こうと、恣意的にそう見
ていたのかもしれない。

「ちょっと待ちなさいよ……」

「一通りの手は尽くしたわ」

「何かないの？ あるんでしょ？ ほら！、何とか言つてよ、ねえ
！」

「一か八かの危険な方法ならあるわ。あなたが手を貸してくれるな
らね」

「貸すよ！ いくらでも手を貸すつてば！」

「だけどそれだつて助かる可能性から言えば、このまま萃香を寝か
せておくのと大して違はないわ」

「でもこのままじゃ……」

必ず死ぬ。靈夢が萃香に見た未来は口にできなかつた。

紫は静かだが力のこもつた声で言つた。

「私たちは選ばなくちゃならない。生死を萃香自身に委ねるか、独
善で殺してしまうリスクを負いつつも助けるか」

「萃香がこうなってるのは私の不注意もあるのに、あとは本人に任せて死んだらそれは萃香の責任だつて言つの？」

靈夢は歯を食いしばった。

「そんな選択肢選べない！」

そして覚悟を決めた。

「私は、いえ、私が！　萃香を助けたい！」

涙に濡れていたが、その目は強く光る。

「……わかった。あなたがそこまで言うんだったら、やつてもいいわ

そこで初めて紫は笑顔を見せた。

しかし、その笑顔がさつきから泣きっぱなしの自分を落ち着かせるために作られたのが明らかなので、かえつて靈夢は声を出して泣き始めてしまった。

「あなたのせいじゃない。背負いすぎちゃだめ

紫は靈夢の肩をそつと抱いて優しく頭をなでた。

そうして紫は靈夢が落ち着くまで慰め続けていたが、一度も「丈夫」とは言わなかつた。

1 異変（後書き）

「メーティーのつもりで書き始めたのに……

おかしいな、なんでこんなシリアルなんだ！
少し真面目なシーンを入れてみただけなのになあ。
次からはだいぶ軽くなる予定です。

次回「スキマ合体」、「N(う)」期待！

「萃香と合体！？」

靈夢は驚いた。

「そりゃ。あなたと萃香の境界を操り、一体化をせんのよ」「そんなことができるの？」

「たぶん」

「『たぶん』って……」「

靈夢は呆れた顔で紫を見る。

「仕方ないじゃない。まだ研究中の技なんだから」

「研究中！？ 平然と言つてるけど相当危険じやない！」

「まあ、人体実験に貢献すると思えばいいこれ」

「『いいわ』って何がいいのさー？」

靈夢はますます呆れた顔をした。

しかし紫はそれを無視して説明を続ける。

「でも、この力関係だと合体というより封印に近いわね。あなたの体の一部に弱つた萃香を封印するの。それによつて元気な巫女さんから生命力をいただけるわ。たぶん」

「また『たぶん』って……」

「鬼を封印するにはやっぱり左手がいいんじゃないかな」

「どうして？ 利き腕じゃないとか、心臓に近いとか？」

「ぬ~べ~で読ん……いや、文献で読んだことがあるの」

「へえ。そういうものかしら」

「とにかくまあ、封印自体はすぐに済むわ。でも問題はそれだけじゃない」

さつきまで飄々としていた紫も深刻な様子になつていた。

「スキマを操つて封印した時に、弱つた萃香が無事でいられるかどうかがまづ第一の賭け。その後しばらくしてあなたが無事でいられ

るかが第一の賭け」

「私？」

「そう。弱った萃香が死なざにいれば、そのうち生命力を取り戻してくるはず。そうなると今度はあなたの生命力を奪いすぎてしまう可能性があるの。相手は鬼よ。回復して力関係が逆転すれば、あつという間にあなたの存在は消えてしまう。それが萃香に取り込まれただけならなんとかなるかも知れないけど、萃香が宿主であるあなたの生命力を吸い尽くして殺し、萃香とともに死んでしまう可能性も十分にあるわ」

「私自身が危険に晒されるのは覚悟してるけど……」

「そこであなたの力を使うの」

「私の？」

「ええ、あなたの強力な結界が必要なの」

「……なるほど！」

さすがは博麗の巫女。結界に関しては物分りがよかつた。

「そう、結界を使って封印の範囲を左手に制限するの。難しいとは思つけど……できるかしら？」

「何言つてると、私は博麗大結界を守る巫女よ！ 甘く見ないで！」

「それよりもう早くやつてちょうだい！」

「そうね、始めましょう」

靈夢の手の平に紫が触れると、そこにぱっくりとスキマが開いた。

中をのぞいても何もない。何だか気持ちの悪い光景だと靈夢は思つた。

そして萃香に紫が触れると、その腹部に大きなスキマが開いた。

何も知らない人が見たらまさに凄惨な光景でしかない。

「「」に手を」

紫の指示通りに、靈夢は左手のスキマを萃香のスキマにあてた。

紫は深呼吸をした。そして氣合のこもった声が放たれた。

「スキマ合体！」

するとスキマがなくなつて靈夢の左手が萃香の腹部に吸い寄せられて一体化したかと思うと、今度は萃香が靈夢の左手に吸い込まれるようにして消えていった。

「おお……で、上手くいったの？」

靈夢の左手には特に変化はない。

「わからない。いま左手はどんな感じ？」

「うーん、冷たいというか、血の巡りが悪いというか……あつ、でもだんだんあつたかくなつてきてるー。」

ドクン、ドクン、といつ感覺と共に、次第に左手は熱を持つていつた。そして見た目も少しずつ変化しているようだつた。

「私の手じゃなくなつてる！」

靈夢の右手と比べると、左手は一回つしゃべ、子供っぽい。

「萃香の手ね。成功だわ。あー疲れた」

そう言つて紫はその場で仰向けに寝転んだ。

「次は私の結界ね」

「ええ。まず手首から上を萃香に侵食されないようにする結界を張つてちょうだい。その次に肩までで食に止めるための結界」

紫は寝転んだまま指示を出した。

「肘にはやらなくていいの？」

「問題ないわ」

靈夢は何やらびぶつぶつと囁え、無駄のない素早い動作で手首、そして肩にお札ふだを巻いた。

「結界はお手の物ね」

「まあね」

靈夢も一段落ついてほつと胸をなでおろした。

「萃香が回復したら切り離すから、それまで鬼に食われないようにな
頑張りなさい。萃香の力が強くなりすぎたら能力を使うのよ
「能力？」

「そう、萃香の能力よ。ぐっと力を込めたりなんかすれば使えるん
じゃない？」

「そんなあやふやな

「きつと使えるわよ。能力を使えば妖気も減つて侵食も弱まるはず。
当然使い切つたら萃香は死んじゃうけど」

「わかったわ。なんとかしてみる」

靈夢は左手を優しくなでた。

「大丈夫。必ず助けるから、萃香」

2 スキマ合体（後書き）

なんだかまだコメーティーっぽくないな。
ジャンル変えよっかな。

「さてと。これからあなたにやつてもらいたい」とがあるの
そういうて紫はおもむろに起き上がつた。

「『異変』ね」

靈夢はにやりと笑つた。

「ふふ、血が騒ぐ？」

「ええ。妖怪退治は病みつきになるわ」

「でも残念ながら、これからやつてもらいたいのは『退治』ではなく
く『救出』なの。萃香と同じように弱つていてる妖怪を『ここ』に運んで
きてほしいの」

「凶暴化した奴らは退治しなくていいのかしら」

「そいつらはものを考える力を失つてスペルカードのルールなんか
通用しないから、今のあなたじゃ危険よ。それに、下手に刺激して
戦闘が始まつてしまつより、なるべく多くの妖怪を効率よく救出す
べきだわ」

「確かに」

「それと、誰かサポートがほしいわね」

「あてはあるの？」

「もちろん。藍らんと橙ちえんに元気な人間は博靈神社に来るよつに呼びかけ
たビラを配らせてるから、そのうち誰か来るわ」

「藍と橙はサポートに出来ないの？」

「たぶん無理ね。式つていうのは私の妖気の入れ物だから、異世界
の妖気の影響を受けやすいの。で、それを防ぐために乾電池で動か
してゐけどそう長くは持たない。今頃電池切れで転がつてゐるわ」

「式つて乾電池使えるの！？」

「ええ、スキマ合体の技術よ」

「おそるべしスキマ合体……」

「むしろリスクが少ないぶん、物との合体こそ真骨頂なの。まあ、それよりもまたスキマ開いてみましょ」

紫が何もない空間に手をかざすと、ぱりくりとスキマが開き、そこから博靈神社が見えた。

「じゃ、誰か来てないか探しに行つてちょうどだい。三分後に同じ場所でスキマを開くわ」

靈夢はスキマ空間を出て、ビラを見た人間が来ていなか探し始めた。

するとすぐに見つかった。ぐつたりしたアリスを支えながら、魔理沙が賽銭箱に座つていたのだ。

「来たんだぜ？」

アリスの陰から人形の上海シャンハイと蓬萊ホウライも飛び出してきた。

「ビラで呼んどいて待たせるとは」

魔理沙は怒った表情を見せたが、実際には安堵しているようだった。

アリスはぐつたりしていて意識はないようだが、萃香の時と違つて血色はよかつた。

「一体幻想郷はどうなつてるんだ？」

「話はあと。とにかく紫のスキマ空間にアリスを避難させるのが先よ。いっしつに来て」

靈夢は魔理沙にアリスを背負わせ、先ほどスキマ空間から出でた場所へ戻つた。

「そろそろ開くから待つて」

数十秒のうち、空間に水平な割れ目ができる、そこからぱりくりとスキマ空間が開いた。

「おまたせー。ビンゴー！ やつぱり来てたわね」

紫はアリスを無事に収容すると、魔理沙に大まかな現状を説明し始めた。

アリス・マーガトロイド、
救出。

「で、バスモはどうなったんだ?」「

「バスモ?」

「あ、萃香だつたぜ」

「萃香なら私の左手にいるわ」

靈夢の言葉を魔理沙は理解できないでいた。
紫はさらにスキマ合体についても説明した。

「……とこう訳なの」

「よくわかつたぜ」

そう言つたがおそらく魔理沙はまだ理解できていない。

「それようどうして上海と蓬萊は動けるの?」

「この一体だけ中身が機械つて聞いたことがあるぜ」

「ワタシターチ」

「デンチシーキ」

「喋れんのかよ!」

思わず三人ともども突つ込んだ。

「ぎこちない喋り方が気持ち悪いぜ」

「しかしあまアリスも研究熱心なこと」

「靈夢が怠惰なだけよ。時代はいま電池式だわ」

「私も電池式のキノコでもつくろうかな」

魔理沙の発言はスルーされ、話題はもっぱらアリスの機械人形だ

った。

「あなたたち、スキマ空間の外で魔法は使えるの?」

「ツカエナーメ」

「デモ、ウゴキマワツタリ、ツウシンシタリハデキマース。あと普

通に喋れるよ」

「だったら最初から普通に喋りなさいよ!」

「いやあ、キヤラ設定くずすとアリスの奴アホみたいに怒るんだよ

ね

蓬莱は少し口が悪いようだつた。

「まったくあんたたちは……」「

流石の紫も呆れた様子だつた。

「通信機能はどうなつてるの?」

蓬莱が答えた。

「アリスの持つてる機械式万能魔理沙人形を使えばババアでも通信できるよ」

「えつ」

魔理沙は驚いた。

「ババア? ひどい言われようね、靈夢」「

「えつ」

靈夢もまさかの被弾に驚いた。

「それはどこにあるの」

紫が問いかけると上海がアリスを起こし始めた。

「アリスー オキテー。メカマリサダシテー」

アリスは目覚めないが、何かつぶやいている。

「……だめ……魔理沙は渡さない……」

少し、変な空気になつた。

「勝手に取りやいんだよ」

「ソンナノダメダヨー」

制止する上海を振り切り蓬莱は素早くアリスのスカートの中に潜り込み、何かを持つてきた。

それは手乗りサイズの、ものすごくメカっぽい魔理沙だつた。

「なんか怖いぜ」

「これが機械式万能魔理沙人形、通称メカマリサ。自律人形じゃなければどこでアリスじゃなくても俺たちと通信できるよ」

どこに入っていたんだろう、という疑問を押し殺し、紫はそれを受け取つた。

「それじゃあ人形たちには靈夢のサポート役を頼むわ。その三人を

救出組とあるから、今すぐに出発してちょうだい

「おうむ

「ワカリマシター」

蓬莱と上海は結構乗つ気なようだった。

「魔理沙は？」

「他にやることがあるから残つてしまつわ」

「なんなぜ？」

「秘密。それよりあなたたち、早く行きなさい

靈夢たちは紫と姫され、スキマ空間を出た。

スキマ空間を出ると、そこは博麗神社の大鳥居の下だった。

振り返れば空間に開いたスキマはもうない。紫も妖怪であるので能力を使うのは楽ではないのだろう。

靈夢は感覚を研ぎ澄ましてみても妖氣の違いを感知できなかつた。つまり『異変』を認識出来ないのだ。

妖怪ではないので靈力を使うのにも支障はなさそうだった。もしかしたら封印や結界などの大きな靈力を消費するような術には影響があるのかもしれないが、飛んだりするぶんには問題はない。

「蓬莱、動作確認お願ひ

「もうチェック済み。問題ないよ。いつでもババアと通信できる」「魔法は?」

「やっぱり使えないね。アリスが起きたら少し使ってもらえるようになるかもしねないけど」

「そう。じゃあ蓬莱は周囲の警戒を」

「了解」

「上海は私の死角をカバーしつつ、蓬莱や紫から得た情報を私に「了解」テース

救出組が役割を決め、境内を抜けようとしたとき、上海が靈夢に伝えた。

「先行する蓬莱から連絡。何か近づいてる」

そりややっぱりあんたも普通に喋れるよね、と思ひながらも靈夢は警戒を強めた。

「蓬莱から連絡。斬られそうになつたみたい

「敵か!」

目の前の茂みを何者かが進む音がもう聞こえ始めていた。

スキマ収容の拠点である博麗神社への敵襲ならかなりますい。靈

夢は何としてもここで食い止める覚悟をした。

すると、「妖夢だつたよー」と緊張感のない声で蓬萊が出てきた。

一気に気が抜けた。

「幽々子様が！」

茂みから出てきた幽々子を背負う妖夢は、泣きそつた顔で靈夢に迫つた。

「あーはいはい大丈夫。さつさと鳥居の下に行きな

さつきは無駄に焦つてしまつたので、靈夢は少し機嫌が悪い

「へ？」

非常事態だと思っていたのにぞんざいな扱いを受け、訳もわからず言われるがままに妖夢は歩いていった。その際に妖夢は何度も振り返り「これでいいんだよね？」といつ視線を送るが、面倒なので靈夢は無視していた。

「お前鬼だな」

「いいじやない、どうせスキマ空間に行つて寝てりや元気になるんだし。一応鳥居の下で十分」とにスキマ開くことになつてゐるけど…

…上海、一分後にスキマを開けるよう連絡して

「了解」

気を取り直し、救出組は境内裏の雑木林に入つていった。

西行寺幽々子、救出。

5 救出組（後書き）

毎日ちまたいま更新です。

そう言えば妖夢は元気だつたし一応人間といつことでいいのだろうか。いやもしかすると気が付かなかつただけで、半靈はものすごく具合が悪かつたのかもしれない。

半靈だけ死んでしまつたらどうなるのか。気になる。ものすごく気になる。今度こつそり半靈だけ殺してみようか。

妖夢はそんなことを考えていた。

「案外安全だねー」

雑木林を進みながら上海が言つた。蓬萊と比べると真面目田そつな上海も、もう完全にカタコトで喋るのをやめている。

「妖怪つていつても、うじやうじやいる訳じやないからね。それにしても、どこへ向かつたらいいかわからないわ」

妖夢たちは特に目的地を決めず、ただ道なりに歩いていた。

おそらく凶暴化せずに瀕死の妖怪は高レベルであるだろうから、周囲を歩き回つたら紅魔館か永遠亭あたりに行つてみようかと妖夢は考えていた。

飛んで行けばもつと早く探索できるだろうが、目立つのは危険なのであえて徒步を選択している。あくまで救出組であり、極力戦闘を避けるべきだからだ。勝ち負けの問題ではなく、時間も体力も無駄にできないのだ。それに萃香のことも考えると戦闘はリスクが大きい。空中で派手な戦闘を始めてしまえば他の凶暴化した妖怪も集まつてくる可能性も高く、リスクはどこまでも増大する。だから面倒でも歩かなければならない。

とはいって、妖夢はそれほど悪い気分ではなかつた。

普段は飛び越えてしまつので雑木林を歩くのは久しぶりだつた。

樹木の湿り気を含む空気を吸えば緊張は和らぎ、風が葉を揺らす音は耳に心地よい。

じつやつと歩くのも気持ちいいな。妖夢は思つた。

「！」の道も場合によつてはロマンチックね

「靈夢のんきー」

そう言つ上海にも緊張が感じられなかつた。

それにしてもこの子かわいいわね。靈夢は上海を氣に入つていて。同じの一体くらいアリスにもらえないかしら。素直だし家事や神社の掃除もやつてくれそうだわ。

しかし口は悪いが優秀な蓬萊も捨てがたい、そう考えていると、その蓬萊から「前方上空に敵影確認」との連絡が入つた。靈夢はすばやく道から茂みへと入り、しゃがみこんだ。草や土のにおいがぐつと近くなつた。

蓬萊によるとルーミアらしいが尋常な様子ではないとのこと。やがて木々の隙間からルーミアらしき姿が確認できた。しかし顔つきは凶悪で、いつもの間の抜けたルーミアではない。

靈夢たちは「！」のままやつと息を潜めた。今はそつするしかないのだ。

ルーミアはちょうど真上に迫つていた。

靈夢は自分の体からじつとじつと汗が滲むのを感じた。鼓動が全身に響く。

「ペペペペシ！…ペペペペシ！…ペペペペシ！…オ屋テース。正午二ナリマシター！」

突然上海が言つ出した。靈夢は呆気に取られた表情で上海を見た。

「違うんです！…『めんなさい…』『めんなさい…』」

泣き出しそうな声で謝り続けるがもう遅い。見上げればルーミアと田が合つた。

「ぐつうううう……」と獸のよひにつけ、上空から一直線に急降下してきた。

「逃げるわよ！」

靈夢は瞬時に四方の木の幹に御札を投げ付け、上海を掴んだ。

ルーミアの拳が服を掠めるが、靈夢は上手く回避した。靈夢は避けた勢いのまま全力で飛翔し、距離をとつた。

そのたつた一撃で、ルーミアの周囲では木々がなぎ倒され、土がえぐれていた。

ルーミアが靈夢を追おつとした瞬間、靈夢の喝が放たれた。

「結界呪縛！」

するとルーミアを中心とした光の輪が現れて急速に狭まり、ルーミアを捉えた。

「御札による簡易的な結界だからそつ長くは持たないわ。今のうちにお逃げましょ」

自由を奪われたルーミアは必死に暴れていた。かなりの興奮状態にあり、がむしゃらに闇を振り撒いていた。そのおかげでルーミアの周囲一帯はすぐに闇に包まれた。

「敵の方から煙幕を張つてくれるなんて親切ね」

少し余裕ができたので、離れたところにいた蓬萊も合流した。靈夢はとつさに逃げた方向から、紅魔館へ向かうことにした。そこから湖が小さく見えていた。

「さつきは「めんなさい」！」

上海は泣いていた。

「一体なんだつたのよ」

「私たちは自律人形つていつてもアリスの命令に基づいて動いてるんです。だからアリスが倒れて『日常生活を補佐せよ』といつ命令から更新されずにそのままで、自動的に時報を鳴らしてしまったんです。ごめんなさい！」蓬萊は時報なんかオフにしてただろうけど、私ドジだから……うづく……

「まあ何とかなつたんだから、気にすることないわ」

「そうそう。俺も鳴らしちゃつたし気にすんな」

「あんたもかい！」

靈夢は蓬萊の頭を大袈裟にひっぱたいた。

「とにかくこのまま空中にいるのは目立つから林へ戻るわよ。上海、先に行つて妖怪がいないかチェックして

「わ、わかりました！」

上海は今度こそ役に立とうと張り切り、急いで下へ降りていった。

「ふふ、あなた優しいのね」

「なんのことだか」

靈夢と蓬萊は何も言わずに笑い合つた。

そして上海からの連絡を受け、一人も雑木林の中へ入つていった。

6 境内裏の雑木林（後書き）

いろいろ辺から書き慣れてきました。

靈夢は萃香と合体した左手が、徐々にだが、力を強めていくのを感じていた。自分自身の手として動かせるのだが、その手が放つ熱や拍動は明らかに自分のものではなかつた。

疲れない程度に急ぎ足で林を進み、湖の近くまで来た。湖の上となると、かなり見通しがいい。それは即ち敵に見つかりやすいということだ。

ここは慎重に行こうと靈夢は思った。

まだ雑木林を抜けていながその場に留まり、蓬莱を戻候に出て索敵にあらせた。

蓬莱の情報によると、湖畔には十匹前後の妖精がいる。当然凶暴化している。集団で行動しているわけではなく、まばらに存在し、互いに争つている者もいるといつ。

それ以外の脅威は今のところ確認できない。

少し面倒だが、妖精だけなら何とかなるだろつと靈夢は踏んだ。あまり靈力を使うと萃香とのパワー・バランスが崩れる恐れがあるが、妖精なら予め靈力を込めてある御札だけを使って対処できる。

靈夢は再び進み、湖畔まで来た。木々に身を隠し、妖精を確認した。

しばらくすると、一匹の妖精がふわふわと漂いながら近くへ飛んできた。靈夢は身を隠せる限界まで接近していた。

ゆっくりと呼吸を整え、狙いを定めた。

そして妖精が完全に背を向けた瞬間、すばやく御札を一枚投げ、結界で縛つた。

身動きが取れなくなつた妖精は湖に落ち、しばらく水中から気泡が浮上し続けた。水面の波紋が消える頃になつても妖精が浮かび上がつてくることはなかつた。

ルーミアに使つたのと同じ御札で、なおかつ一枚だけだが、妖精

程度なら半日くらいは動きを封じられる。当然妖精は溺れてしまうが、それくらいでは死ないので問題はない。

同じようにして一匹、また一匹と沈めていった。そうやつて単独で行動する妖精は全て沈めた。

厄介なのは複数でかたまつている妖精だ。といつてもただ乱戦しているだけなのだが、四匹もいる。戦闘を避けるためにはタイミングを見計らい、連續で素早く、一気に終わらせなければならない。四枚同時に投げられればいいが、距離があるので片手に一枚ずつでないと正確性が失われる。両手で同時に投げるとしても四枚だとツーモーションを要する。楽じゃない。

靈夢は御札を準備すると、大きく深呼吸をした。集中が高まつていった。

両手に御札を構えて狙いを定めると、四匹の動きを計算しながら時期を待つた。

今だ！ 精神は素早く四匹に向けて御札を放つた。ほぼ同時に、四匹は水面に音を立てた。

「靈夢すごいねー」

上海が思わず感嘆の声を上げたが、靈夢はすぐにそれをさえぎつた。

「静かに。まだだわ」

靈夢はわかつていた。自分が落としたのは一匹。との一匹は御札が届く前に落下を始めていた。だから四匹の着水がほぼ同時だったのだ。両手で投げていても着水音は最低一回に分かれるはずだ。つまり、確実に他の誰かがここにいるッ！

しかも、さつきの様子だと攻撃速度は靈夢より速い。能力も未知だ。

新手の敵か！？ だつたらまづい。尋常な強じやない。靈夢は焦り始めた。

その時、靈夢の鋭い感覚、いや、勘といつべきものが、敵を捉えた。

果敢にもすかざす飛び出し、相手に先んじてその胸に御札を突きつけていた。たつた一枚でも、直接触れた状態からなら心臓を縛つて殺せる。

しかし、先手を打つたはずの靈夢の首筋にも冷たい感触があつた。それは頸動脈を正確に捉えた銀のナイフだった。

「なんだ咲夜か」

「靈夢……」

互いに肩の力を抜き、突きつけたものを下げた。靈夢の緊張も一気に解かれた。

だが咲夜のほうは緊張を保つたままだつた。

「お嬢様が！」

そう叫ぶ咲夜の背中にはレミリアがいた。

「あーはいはい、まず木陰に隠れよう」

対照的に靈夢は冷静だつた。

木陰に身を隠し、蓬莱と上海に周囲の索敵をさせている間、咲夜に紅魔館の状態を聞いた。

レミリアとパチュリーが衰弱し、フランが凶暴化しているらしい。門番はわからない。咲夜はフランの攻撃を受けてかなり疲労しているが、なんとかレミリアだけでも背負い、紅魔館を脱出して來たのだという。

一方靈夢は幻想郷に起きている『異変』をざつと搔い摘んで説明した。

「という訳だから、あとは紫に聞いてちょうどいい」

「お嬢様は助かるんでしょうね！？」

「だから余裕で助かるって言つてるじゃない。とにかく博麗神社の鳥居んとこ行きやいいから。あんたの能力ならさつきみたいに先手打たれてからでも対処できるんだから大丈夫よ、うん、行ける行ける

る」

そう言つて靈夢は追い返すようにして咲夜とレミリアを送つた。明らかに靈夢の機嫌は悪かつた。

「ちょっと扱いが雑だよー」

「つっさいわね、どうせ助かるからいいのよー。」

「いめんなさー……」

「……あんたまだ時報のことでも落ち込んでんの?」

「上海はこくりとつなづいた。」

「私は全然怒ってないよ」

「ほんとに?」

「嘘なんか付かないわ」

上海が笑顔になつたのにつられ、靈夢の機嫌も良くなつた。

「しつかし、さつきは確実に先手を打つたのになー。時を止めるなんて滅茶苦茶な能力だよ。まったく、死ぬかと思つたわ」

靈夢は先ほどナイフを突きつけられた首筋をさすつていた。

「うわ、ちょっと血い出でんじやん……」

無論、靈夢の機嫌は再び悪くなつた。

レミコア・スカーレット、救出。

7 湖畔の敵影（後書き）

何だかバトル要素が強くなつてきました。

8 潮上のアイツ（前書き）

御札の結界で呪縛する技に名前がないのもあれなので、斬新で奇抜であると共に複雑きわまる思索の経緯を経て、「結界呪縛」と名付けました。

チルノがいた。

霧の出でいない時間に湖の上を飛ぶといふことは、相当発見されやすくなる。それはチルノとしても同じで、靈夢たちは索敵しながら進んでいたぶん、先に見つけることができた。

靈夢の頭の中には三つの選択肢が浮かんだ。

一つ目はチルノに見つからないようにして通過し、そのまま紅魔館へ行く。これが最小労力で最短ルートだ。しかし、チルノに見つかってしまうと厄介だ。

二つ目は迂回する。この場でのリスクは一番低いが、迂回先でどんな妖怪と遭遇するかわからない。それに時間もかかる。

三つ目はそのまま進み、チルノを先制攻撃で撃破。上手くいけば最速最短ルートになるが、把握できる範囲でのリスクは最も高い。しかし、未知のリスクというものはほとんどなく、作戦運用者の力量があれば戦況をこちらでコントロールできる。

戦闘の天才と言われる靈夢にとつては、三つ目の選択肢が一番楽に思えた。機嫌が悪くて好戦的になつてているものもあるだろう。ほとんど悩まず三つ目に決めた。靈夢はすでにチルノ攻略の作戦を考え始めていた。

あまり靈力を使わず、御札だけで勝たなければならない。今までと同じ「結界呪縛」なら発動の瞬間に少し靈力を使うだけで済む。靈力は御札を書いたときに込められているのだ。これは微弱な火花とそれで爆発を起こす火薬の関係と同じである。

だがチルノは先ほどの妖精たちよりは強いはずであった。おそらく御札一枚では縛れず、遠くからだと避けられてしまう。

使う御札は？枚。靈夢は作戦を立て終え、その場所で御札を準備した。

上海と蓬萊にはその場に留まつてもらい、靈夢はチルノに気づか

れないぎりぎりのところまで進んでから静止した。攻撃するにはまだ距離がありすぎる。

しかし、靈夢は手に持つただ一枚きりの御札を構え、全身全靈を込め、最大限の速度で、最大限の精度をもって投げた。それは並々ならぬ殺氣を纏っていた。

チルノに届くまであと少しだった。

だが気付かれてしまった。チルノが避けようとしたので、靈夢は早めに結界を発動させた。そのため光の輪はチルノが前に出していた片手だけを縛る結果に終わった。しかもチルノが振りほどこうとするとすぐに結界は破れてしまった。

不発に終わった攻撃ではあつたが、凶暴化したチルノが奮い立つのに十分な脅威だった。靈夢は殺そうという気を込めていたのだから当然だ。

チルノは全速力で靈夢へ迫った。それに対し靈夢は背を向けて逃げた。だがチルノとの距離はみるみるうちに縮まり、靈夢は先ほど作戦を考えていた地点まで押し戻されてしまった。

そしてそこからさらに後退し始めると、靈夢はくるりと反転して止まり、チルノと向き直った。怒り狂ったチルノの顔が目前に迫つた。

「八倍呪縛！」

湖上を漂つていた八枚の御札が光の輪を作り、その中心にいたチルノを瞬時に縛った。自由を失ったチルノは湖に落下し、沈んでいった。

そうして戦闘は突然に終わった。いや、作戦を立てた場所に八枚の御札を設置した時点でもう勝負は付いていたのかもしれない。過剰に殺氣を込めた挑発の一手が火花となり、後は火薬が爆発するのみだったのだ。

攻撃に失敗して逃げると見せかけ深追いさせ、迎撃する。人類の有史以来の定番であり、三国志にも度々登場する作戦だ。高い成功率を持っている。

しかしそんなことを靈夢は知らない。靈夢はいつも、ただその場その場で一番樂をしようとして動いているだけだ。だがそれが合理的な戦術を生み、勝利をもたらす。理に適っていれば樂であり、樂ならば理に適っているのだ。

戦術面においてはそれ故、靈夢は天才と言われる。よく「怠惰は天才の常」と言つが、靈夢ほどその言葉がしつくりくる者はいない。「あのバカ、理性を失つてさらにバカになつてるわね」

靈夢が湖底に沈むチルノを見て言つた。縛られたチルノはさらに興奮し、むやみやたらに能力を行使していた。しかしそんなことをしても自分の周囲の水が凍るだけで、意味はない。むしろ、自分で自分を氷付けにしているのである。

そのうちにそこら一帯の湖が凍つてしまつた。湖底のチルノ自身も凍つて完全に静止しているが、結界呪縛や氷に抗おうとしてさらに能力を使つてしまい、ますます凍つた部分が拡大していく。いずれ湖全体が凍つてしまいそうな勢いだ。

「自分から時間稼ぎを手伝つてくれるなんぞ、親切ね。いや……新雪ね……」

「えつ？」

上海が聞き返した。

「いやだから『新雪ね』つて……」

「何が」

「……何でもないわ」

御札八枚分の拘束力といつても結界呪縛が解けるまではせいぜい數十分。そのあとチルノが冷氣を振り撒くのではなく、自分の周りの氷を碎かなければ脱出できないと気付くまで、ある程度はかかるだろう。もしかしたら永久に碎氷を始めないかも知れない。そうなれば紅魔館から帰つてくる際には再び遭遇せずに済むので、靈夢たちにとつては非常に助かる。

とにかく今はもうチルノを警戒する必要もなく、その場を後にした。そこで靈夢が控えめにつぶやいた。

「……チルノつたら碎氷ね

「えつ？」

「『最強』と『碎氷』を掛けて……いや何でもない。私が悪かつたわ……」

それから会話のきっかけも掴めないまま、靈夢たちは紅魔館へと急いだ。

8 湖上のアイツ（後書き）

サブタイトル「湖上のアイツ」

実は「アイツ」と「アイス」を……いや、何でもないです。

じつして見ると、紅魔館は尋常じやない不気味さを醸し出す建物であった。深い紅色を基調とした外觀は否応なしに血を連想させ、周囲を取り巻く霧も建物の色を反射しているせいで赤味を帯び、血腥さが鼻を突くような錯覚さえ感じじる。

そんな妖しい館の門前に降り立つた靈夢たちは、一人の門番を見つけた。ただ、『異変』が起こるこの時においては、いつもの様子ではなかつた。

「……と思つたらいつも通り寝てんじゃねーか！ 起きろオラ！」

靈夢は横たわる門番の脇腹を容赦なく蹴飛ばした。

「違うよ瀕死なんだよー」

「え？ ああそういうえば……でもいいのよ、顔色もいいからどうせ死にやしないだろうし。それにいつも通りに寝てるって可能性もあるのよ。ほり、寝てるんなら起きなさい」

靈夢は門番の頭を足で揺さぶつた。流石に上海も蓬萊も引いていきる。

「かわいそりゃよー」

「鬼巫女だ」

心なしか門番の顔は青ざめ、いかにも「瀕死」という様相を呈し始めた。

「仕方ないわね……あなたたちでこれ運べる？」

蓬萊は門番の肩口を抱えて持ち上げてみた。

「これ意外と重いな。長距離だと一人じゃ厳しいね。二人なら運べるけど、靈夢を一人残すことになるけど大丈夫か？」

「大丈夫に決まってるじゃない。で、あなた達は行きなさい。早くしないと門番が死んじゃうわよ」

死にそうにしたのは靈夢なんだけどな、といつ言葉を飲み込み、

蓬萊は上海と共に門番を持ち上げた。

「じゃ、靈夢も早く帰つてこよ」

「がんばつてねー」

「まかせなさい」

蓬萊と上海が去り、靈夢は紅魔館の門を入つていった。敷地内に足を踏み入れただけで、そこに禍々《まがまが》しい妖気が漂うのを感じた。それはこの『異変』によるものと言つより、普段は抑えられていた吸血鬼が本来持つ妖氣、いや、狂氣が開放されているからだと靈夢は悟つた。

「ふふ。久しぶりに血が騒ぐ……」

きつといま第三者が見ていたら、吸血鬼とは靈夢のことを指すと思つだねつ。そんな顔で靈夢は紅魔館の扉を蹴り破つた。

一方その頃。

「なあ上海、こいつの名前なんだつけ?」

「……もん……ばん……さん?」

門番、救出。

9 門番（後書き）

文章の「解像度」のようなものをもつと上げたいと思っているのだけど、二次創作ではそれが意外とやりにくい。要するにスカスカになりやすいのだ。世界観が安定しているからそれでも読めてしまうものだけど、やはり質は高くしたい。

紅魔館の扉は重い。その大きく立派な玄関に相応しい、重厚な扉なのだ。

しかし、靈夢の蹴りはもつと重かつた。

蝶番ちょうづがいが砕け飛び、前方に投げ出された扉は壁に叩きつけられた。

「ホコリが舞い散らないのは咲夜の掃除のおかげかしら？」

ちょうど玄関付近にいたため扉と壁に挟まれた妖精メイドが何匹かいたようだつた。隙間から血がしたたる。

「あら、汚しちやつたわね……」

巻き込まれなかつた妖精メイドは呆気にとられていたためにしばらくは襲つてこなかつた。

その隙に靈夢は数匹を蹴り殺し、そこで靈夢に脅威を感じて攻撃してきた残りの数匹もあつという間に処理された。

妖精メイド程度の強さなら御札を使うまでもなかつた。靈夢なら打撃によつて擊破できるのだ。妖精なら殺してもまたどこから湧いてくるだらうから、それで全く問題なかつた。

それに、靈夢は御札の効力を発動させるわずかな靈力すら惜しんでいた。萃香の力が強くなつていたのだ。

左手の結界を内側から押されているような感覚が次第に強くなつていた。それに萃香の力によつて、靈夢は魂の疲労とでも言つべき負担を感じていた。

そろそろ使つてみる頃合かしら。靈夢は左手をさすつた。

10 紅魔館突入（後書き）

修行につき毎日更新を厳守しているため、文量が少ないが更新。一日一回更新しちゃうよりストックすべきだつた。

一週間毎日更新してここまで文量は原稿用紙換算56枚。このペースを守れれば月200枚の生産量。一ヶ月もあれば文庫本一冊を書き上げる計算。でももつと生産能力を上げたい。週100枚が目標。

「ログ・ホライズン」のままれさんすゞすぎ。

1.1 自律人形は夢を見るか？

「ふう。チルノのバカが本当にバカでずっとバカやってて助かったよ」

「チルノさんをそんなに『バカ』って言つたらかわいそうだよー」

門番を抱えて湖を渡つた蓬莱と上海は、林の中に隠れながら進んだ。

「それにしても重いな、これ」

「きっと筋肉質なんだよー」

「いいや、俺の予想だと鍋の食いすぎだね」

「なにそれー」

二人は飛びながら、何か感じるものがあつたのか、顔を見合せた。

「アリス、目が覚めたみたいだな」

「よかつた……」

微量ながら、アリスの妖気が送られ始めたのだ。安堵しながら、二人は体に力が湧き始めるのを感じた。

アリスが十分に回復すれば、電池でまかなつていた動力にアリスの妖気が加わり、魔法も使えるようになる。そのうち他の全ての人物とも繋がり、口頭で会話する必要もなくなる。一人の行動も完全にアリスが把握できるようになる。

「これでやつとアリスやみんなと繋がるねー」

「……なあ、こんなときじやないと話せない話をしてもいいか？」

「え？」

「いや、今ならまだアリスにも会話の内容は知られないし、誰かが聞いている訳でもない。まだ他の人形とも繋がっていない。俺たちにとつては初めての『二人だけの時間』の時間だろ?」

「あつ」

この発見は上海にも十分な驚きをもたらしたようだつた。上海は平衡感覚を失うかのような、とても不安定な感覚に襲われたが、同時に何かふわりとしたそよ風のようなものが自分の背をなでたような気がした。それが「自由」だと知つたのは随分あとになつてからのことだが、その風は上海をもう既に、今までとは違う存在へと変えてしまった。

そして再び蓬莱の言葉を噛み締めるようにして考え、頬を染めた。

「上海はさ、なんでアリスのために働いてんの?」

外には出さなかつたが、なぜが蓬莱の声を聞いて少し狼狽してしまつた。

「なんでつて……そりやあ、アリスのため?」

上海には蓬莱の考えていることが全くわからなかつた。

「でもさあ、俺たちは完全自律とはいかないけど電池のおかげでほぼ自律してるだろ?」

アリスの命令だつて細かい動作とかじやなくて、『目的』を言われるだけだし。

いつもなんとなく従つていて試したことはないけど、たぶん俺たちは他の人形と違つて『嫌だ!』つて断ることもできる。現に今だつてやる前に不可能だと判断したらちゃんと『できない』つて言える訳だけど、他の人形は少しでもやつてからじやないと言えない。

だつたら『意味』つてのを考えてもいいと思つんだ

上海はあえて問うた。

「どういうこと?」

「何のためにアリスに仕えるのか。何のために俺たちは存在、いや生きるのかつてことだ」

それでもやはり答えは決まつている。

「そんなん……」

「わかつてゐる。俺もわかつてゐよ。『そんなんのない』つてことは。でもだからこそ、見つけ出して、自分で決めなきゃいけないと思つんだ。

どうせ本来は無意味な存在だし、それは人間だつて同じはずだ。

『ただ存在している』

それが答えて、きっと撰理みたいなもんだ。でも俺はその自分より多きな存在に『嫌だ!』つてわがままを言つて自由になりたいんだ。そのため、『意味』を決めるんだ

「それってアリスから離れるつてこと?」

「違う違う、そんなことは思つてないよ。こんな大それたことを言つても結局はいつもと変わらない日常が待つてゐる。でもこれからはそこに、『意味』があるんだ」

「じゃあ蓬莱の『意味』……聞かせて?」

「俺は完全自律人形のために、アリスへ仕える。それはアリスの夢でもあるし、俺もなりたい。上海にもなつてほしい。だからそれを実現させるために、どんなことだつていいから、アリスの力になるつもりだ」

「いいね。私もそうする」

ずっと難しい話で深刻になつてゐたが、ここへきて上海は花が咲くように笑顔になつた。

そうだ、ネガティブな話じやないんだ。もつと楽しくなるための話なんだ。上海は上々な気分となつた。

「そんで実現したらもうアリスの妖気に頼らずに済むから、自分の家を建てたい。もちろん、アリスは好きだし感謝してゐからそのままアリスのために働けたら幸せだ。

そんな日が来たら……その家で上海、一緒に暮らしてくれないか?

俺は、上海のために生きたいんだ」

上海は急激に体が火照るのを感じた。

言われたことはわかる。すごく嬉しいつてこともわかる。でも、

何を言えぱいいのかわからない。

上海が言葉を出せずにいても、蓬莱は何も言わずに待つてくれている。蓬莱のほうを見ると、微笑みながら、あえて目が合わないようしてくれていた。上海は体の火照りとは全く別の暖かいものが、体の奥の奥の、そのまた奥から浮かび上がつてくるように感じた。

「じゃあ、私も」

言葉は自然に出た。

体の中の暖かいものは弾けるようにして全身に溶けて、上海を変えていく。気が付けばそれがもつともつと、体の外のもつと外、世界だつて変えてゆく。

上海は木々の縁が本当に縁だと知った。青い空が本当に青いと知つた。土のにおいを知つた。花の色を知つた。鳥の声を知つた。肌をなでる風は確かにそこにあり、太い幹は揺るがない輪郭を作る。

上海はこの世界の存在を初めて感じたのだ。

「なつ、『意味』は必要だろ?」

朗らかな蓬莱の声は、耳に染み入るようで心地よかつた。上海はそれをいつまでも聴いていたいと思つた。

11 自律人形は夢を見るか？（後書き）

「メデイーなのに最近殺伐としてたんでもうプロポーズぶち込んでみた。

本当はラブコメを書いてみたかったけど、この小説にはそんな要素最初からなかった。何か重いぜ。

ラブコメ書けたらもう少し人気出るのかなあ。

博麗神社に到着した上海と蓬萊は、門番を鳥居の下に寝かせた。そこは硬い石置だったが、土の上よりはましなので仕方がなかつた。およそ十分ごとに鳥居の下でスキマを開くことになつてゐるが、メカマリサを使って紫に通信すれば、今すぐにスキマを開いてくれるだろう。『異変』によつてスキマを開くのが紫にとつて非常に重労働であるとはいへ、十分ごとにやつてゐることを少し早めるくらいのことは紫だつて厭わないはずだ。

だが上海は通信せずについた。アリスは一寸田を覚ましてが無理をせず再び眠り始めたので上海たちとの繋がりもまだ微弱であり、こちらから通信しない限り紫のほうには何も伝わらない。示し合はせた訳ではないが、同じように蓬萊も通信せずについた。

意図は同じなのだろうか、そつならばいいと、上海は思つた。

スキマは少なくとも十分以内には開いてしまつ。あと数分あるかもしれないし、数秒しか時間は残されていないのかもしれない。だからといって、二人の間に会話がある訳でもない。二人はただ言葉もなく寄り添つてゐるだけだ。風にざわめく木々に耳を傾けたり、雛の待つ巣へ帰る親鳥を目で追つたり、神社のひんやりとした石畳を肌で感じたり、季節のにおいに胸をふくらませる。ただそれが、愛しい。そんな時間だった。

数分が経つと、不意に目の前の空間にすりつと割れ目ができ、スキマ空間が開いた。

「あら、わざわざ待つてたの？ 連絡してくれればすぐに開いたのに

「紫も疲れてるんじやないかと思つてさ」

蓬萊はしれつと言つてのけた。

「ふふ、いい子ね。さ、早く入りなさい」

本当に疲れていたのかはわからないが、紫は労をねぎらつ言葉に

氣を良くしていた。

中に入ると案外和やかな雰囲気だった。もつ元気になつてしまつた妖怪はすることがないので、がやがやと騒いでいたのだ。妖怪たちは外に出る訳にもいかないし、異変解決まで大人しく神妙にしているなんてことができる性質たちではないのでしょうか。

「こんな事態なのにー」

上海はふくれてませたものの、自分も人のこと言えないな、と思つた。蓬萊のほうを見ると田が合ひ、こつそつと互いに笑い合つた。

「あれ、魔理沙はー？」

魔理沙だけでなく、妖夢、咲夜もいなかつた。

「特訓よ特訓」

「特訓？」

「そうよ。別のスキマ空間で修行に励んでいるのよ。完成した私の新技、スキマ合体のね！」

とある広大なスキマ空間に、見慣れぬ影が三つ。

「……魔理沙。あなたの変身、やっぱり版権的にまずいわよ」

「いや変身後の咲夜のほうがまずいだろ」

「二人ともまずいっ！」

「妖夢、お前はダサすぎるぜ」

「ふふっ、「じめんなさい、ついおかしくって
「わ、笑うなっ！」

12 二人の帰還（後書き）

ストックなしでの毎日更新はきついなあ。せっせとストックしな
きや。

次回は「戦闘の天才」！

咲夜の話によれば、パチュリーは図書館にいる可能性が最も高いという。咲夜もフランから逃げつつレミリアを連れ出すので精一杯だったのにで確証はないが、パチュリーがここ数日自室に戻つていなければ確かだつたのだ。だから図書館の奥にこもりつ放しのまま倒れているのではないと咲夜は話した。

ついでに小悪魔がうるついていたら殺しておいてくれとも言われた。

妖精と違つてそう簡単に復活できないような気がするが……と靈夢は思ったが、深くは考えないようにした。

図書館に着くまで、幸いにも敵と遭遇せずに済んだ。中に入つて調べてみると案の定、奥のほうでパチュリーが倒れている。しかし図書館から連れ出そうとしたとき、奴は現れた。

フランドール・スカーレット。

図書館を出てすぐの廊下で鉢合わせてしまつたのだ。

「結界呪縛！」

靈夢は即座に御札を投げ、パチュリーを物陰に寝かせた。結界呪縛も芳しい効果はなかつた。ほんの一瞬動きを止めるものの、フランは難なく呪縛を振りほどく。

フランが殴りかかるつとすると、靈夢は瞬時にその力の強大さを察した。

まともに食らつたら一撃だわ。

靈夢は相手の攻撃時はとにかく避けることに専念した。相手の動きを読み、確実に避けてゆく。戦闘時の機動力にすば抜けたものがいるわけではない。しかし、靈夢の精密な回避能力はスピードを凌

駕する。

フランの攻撃に対し、靈夢は大量の御札を使って回避する。フランが殴りかかるれば、投げ付けた御札でその手を縛り、攻撃自体をそらしてしまつ。あるいは、攻撃のタイミングをワンテンポ遅らせ、それを利用して回避する。

フランの攻撃の誤差分を考慮し、御札はショットガンのように大量に投げつける。だが萃香の力が強まつていて、投げ付けた全てを発動させることは危険であるため、そのうち使用するのは多くて数枚だ。結果としてほとんどが使わずにただ床にばら撒かれるだけの御札となつてしまつが仕方ないことである。回避をするたびに十枚近くの御札が床に散らばつた。。

しかし、靈夢はその無駄遣いを気にしたりはしなかつた。堅実に、ただ堅実にリスクを回避していく。それが第一優先なのだ。

御札を使って避け切れそうにないときは、左手で攻撃を弾いた。萃香の手である。鬼の手だけあって、靈夢の元々の手とは比べ物にならない強度だった。ぐつと力を入れれば一回りも一回りも大きくなり、衝撃は伝わるものフランの攻撃を十分に受けられる。ただやはり手の部分だけなので、それに頼りきることはできず、回避の一手段としてしか使わなかつた。

フランの破壊的な攻撃を十数回は避けたころになると、流石に靈夢の御札も残り少なくなつていた。床に散らばつたものは百枚くらいあるはずだが、拾つていい余裕なんか微塵もない。

リスクは確実に回避してきているが、靈夢に残された猶予は少なかつた。

フランも攻撃が当たらないので興奮し、半ば発狂したように拳を振るう。

靈夢はフランに知られないように左手に力を込めていた。どの程度まで能力を使えるか試していたのだ。そして、萃香の命が安全でいられる水準を感覚的に探り、その最大の値で保つた。準備は全て整つた。靈夢はタイミングを計つて、

フランは動きが鈍くなつた靈夢に対し、右の拳で渾身の一撃を入れようとした、左足を踏み込んだ。

靈夢が待つていたのはこの瞬間だった。

瞬時にフランの左足を結界呪縛で固定した。フランは床に満遍なく散らばつた御札を何枚も踏みつけていたので難しいことではなかつた。

もちろんこれだけでは効果は見えてこない。もとより踏み込んだ足なんかを固定されてもフランは気が付かない。殴り終わるまで動かすものでもないし、攻撃を邪魔された訳ではないのだ。

靈夢が奪つたのは選択肢だつた。フランは靈夢の顔に渾身の一撃を叩き込む。これ一択になつたのだ。

相手の攻撃を読めれば、確実に回避することができる。しかし、靈夢はそうしなかつた。靈夢が回避できる可能性は完全に絶たれた。あらうことかフランが踏み込んだ直後に靈夢も踏み込んでいたのだ。

クロスカウンター。

靈夢が狙つっていたのはこれだつた。萃香の左手の強度とフランのパワー。この戦闘で突出していた二つの要素を最大限、有利に活かすにはクロスカウンターしかないのだ。

全力で右の拳を出したフランが、ほぼ同時に繰り出された靈夢の左ストレートを見た時にはもう遅い。体重の乗つた前足は固定され、体は違う選択肢を選べない。

靈夢の左ストレートはコンパクトに繰り出されたが全体重が乗つていて、さらにその拳には凝縮された鬼の力があった。

次の瞬間、靈夢とフランの全パワーが、鬼の手の強度をもつてフランの顎に叩きつけられた。力が顎に集約されているため、衝撃は体に逃げない。振り抜かれる拳と共にフランの顎先が体とちぐはぐな方向を指し、首はひどくねじれてゆく。

遅れて靈夢の顔にフランの力の抜けた手がペちりと当たつた。一

瞬にして意識を失ったフランは前のめりに倒れた。

「これで顎が砕けないなんて恐ろしい子ね」

全て仕組んだ通りに進んだので靈夢は落ち着いていた。

渾身の一撃によつて萃香の力が弱まつたのを確かめると、即座にフランと距離をとり、相当量の靈力を放出した。

「百倍呪縛！」

靈夢は床に散らばつた全ての御札を発動させ、フランを縛つた。これもやはり予定通りだつた。

「良い子はお昼寝の時間よ」

紅魔館の古びた柱時計が三時を知らせた。

思えば最初から最後まで靈夢の思惑通りだつた。靈夢はそこに物足りなさを感じつつも、概ね満足していた。

タイトアグレッシブ。

靈夢の戦い方を表現するならば、これしかない。

タイト、つまり基本は堅実であるが、攻撃にでるとなるとアグレッシブなのだ。回避において靈夢はスピードに長けている訳ではない。それよりも精密性を重視し、堅実にリスクを負わないようにしている。

そしてパワーがある訳でもないが、攻撃に出るとなると大胆だ。きつちり攻めきる。相手の様子を見ながら決めるのではなく、ここだ、と決めたらそこで全力を出す。

この一点はスペルカードルールにおいては「低速回避」と「決めボム」に集約される。

タイトアグレッシブというのはポーカーなどのリスクを読む勝負事において使われる戦略の一つだ。

これは決して短時間で勝利を収めるような戦略ではない。勝負が

長引く傾向すらある。がしかし、長期的に見れば最も合理的な戦術なのだ。不確定なリスクは負わず、リスクを最小にとどめ、攻撃に出たら確実にものにする。着実に、だが必ず、勝利へと近づいてゆくのだ。それ故、タイトアグレッシブは強い。

もし仮に、この世に「勝利の方程式」というものがあるならば、それはタイトアグレッシブに他ならないだろう。それほどに合理的な戦略なのだ。

しかしながら、靈夢はそんなことを知らずに戦っている。タイトアグレッシブという戦略をもたらしたのは単に性格だ。「避けるときはきつちり避けたい。攻めるときは思いつきり攻めたい」と考えているだけなのだ。

これが魔理沙だと「ササッと避けてすぐ攻めたい。攻めるときは攻めまくりたい」と考えていて、それを戦略としてしまうと、素早く避けたことで自滅し、オーバーキルで力を口スするといったようになりがちで、大変非効率となってしまう。

そのことからも靈夢の無自覚に取っている戦略がいかに優れているかがわかる。単に樂をしようとしているだけだが、そのうえ戦術もいつだって合理的である。

それらの要素が靈夢にもたらすのは絶対勝利であり、彼女の戦闘を見たものは口々にこう称す。

戦闘の天才。

そう、靈夢が幻想郷で一番強いのは最強のパワーだからではない。最速のスピードだからではない。最上の能力だからではない。

戦闘の天才だからなのだ！

御札をほとんど使ってフランを呪縛した靈夢には余裕があった。
「すぐに目が覚めるだらうから結界呪縛は必要だけど、百倍はやりすぎたわね」

しかも百倍という数は大雑把なもので、懐の御札の残りから推し量ると百一十枚くらいで呪縛している。昏倒している相手にそれは流石にやりすぎである。

とりあえずパチュリーを抱え、台所へ向かった。靈夢は朝から何も食べていなかつたのである。

大きな冷蔵庫を開けると、昨晩咲夜が作つておいたのだろう、ミルフィーユが六皿も用意してあつた。

一皿手にとつてその匂いをかいでみると、上質な甘味が脳を直接刺激するようだつた。一口食べると、過剰な甘味などはなく、そこにはつたのはむしろコクと称される類の甘味であり、味わう者の探求を許しつつも飽きさせない深さがあつた。

舌鼓を打ちながら、ついつい五皿も平らげた。考えがあつて一枚だけはちゃんととつておいた。

靈夢はそれでもまだ足りなかつたので、次は何の肉かわからない肉を適当に焼いて食べることにした。霜降りの立派な肉で、おそらく人肉ではないはずだ。吸血鬼の館なので人肉であるリスクは当然ある。しかしここは決めボム。アグレッシブに、食べると決めたら何でも食べるのだ。

勝手にフライパンを出し、少量の油を敷き火に掛ける。フライパンが温まる間に調味料を探す。ちょうどいいことにニンニクがたくさんあつた。ここ家の吸血鬼はニンニクもいけるらしい。その証拠にどれも青森県産である。幻想郷では手に入りづらいだらうし、これはかなりのこだわりだ。

ササッと皮を向きニンニクをスライスする。みずみずしくて、香りもまろやかであり質の高さが窺える。ちなみに包丁も悪くない。

さすがナイフ使いの咲夜。

温まつたフライパンにニンニクを投入し、きつね色になつたら取り出す。紅魔館の一角は食欲をそそるニンニクの香りが立ち込めた。そして厚切りの肉を焼き始める。すぐに表面から滲み出るようにして肉汁が姿を現す。厚みがあるので火は強くしきれないようにして調節する。

焼きあがつたら火を止め、置いてあつた岩塩をふりかけ、ペッパー・ミルで粗引きコショウをまぶす。

靈夢はもう我慢できなくなつたので盛り付けをせず、包丁で一口サイズに切り分け、フライパンのまま食べ始めた。

口に入れた瞬間に知るのは無造作に入れた先ほどの岩塩のやさしい塩氣だ。母性すら感じる。やがて広がるコショウの明晰な香りは無知な口内を啓蒙していく。

一口かめばその柔らかさが極上だ。味は牛肉、それも間違いなく和牛だ。濃厚なミルクにも似た風味を持つ和牛特有の脂が口の中にいっぱいに広がるのだ。噛むほどにじゅわっと湧き出で、それは肉の柔らかさと相まって、肉なのに喉越しすら感じさせる。

「ああ、生きてて良かつた」

靈夢はそんなことを言つつもりはなかつた。しかし心の底から出したその声は、靈夢の判断より先に出たのだ。まぎれもない本心だつた。

気付けば肉はもうなくなつていた。食べた記憶なんかない。それが和牛の実力だ。

その後さらにも食器棚の一番上にあつた、おそらく高いであろう紅茶をじっくりと堪能した。

この芳醇な香り。いうならば歴史！　いや、積み重なる味の地層！　靈夢は一人でそんなことをやつて消耗した体力を回復させていった。

冷凍をあさるとハーゲンダッツがあり、迷つた挙句、誰もいないにも関わらず「萃香のためよ、うん、萃香のため」と言い訳じみた

つぶやきを繰り返しながら食べ始めた。

そうやつて三十分はくつうき台所を出ると、おもむろに一枚のスペルカードを出した。

「夢想封印！」

靈撃によつて台所は大破し、靈夢のやつたことの痕跡は消え去つた。それなりの靈力を消費したがやむを得ない。

ちなみに靈夢の「うつところが影で「鬼巫女」と呼ばれる所以なのである。

パチュリーを背負い、そろりそろりとフランの様子を窺つた。

「意外と効いてたみたいね」

あの一撃で顎も碎けず無傷だったのであまり効いていないかと靈夢は思ったが、そうではなかつたようである。フランはまだ氣を失つたままであつた。

靈夢は持ち出した最後の一皿のミルフィーユを少し取つてフランの口にこすりつけ、残りを綺麗に食べた。そして皿を叩き落し、破片のいくつかをフランの服の中に入れた。

「萃香のため萃香のため」

自分でもちよつとやりすぎたと思つたが、靈夢は無意味な言い訳をし続けた。

しかし意識を失い、凶悪な表情でなく、力の抜けた年相応の少女になつてゐるフランの可愛い顔を見ると、さすがにフランがかわいそうになつてきた。

靈夢はフランを抱え、パチュリーと共に救出することにした。

凶暴化したとはい、スキマ空間で寝ていれば元に戻るだらうし、仮に暴れたとしても今頃元気な妖怪がわんさかいるはずだから大丈夫。そう考えた。

紅魔館を出ていく靈夢は、穏やかに眠るフランの頭をなでながら、母親のような優しい笑みを纏つていた。

が、口に付いたミルフィーユは拭いてやらなかつた。

靈夢はやはり、鬼巫女であった。

13 戦闘の天才（食事シーン加筆）（後書き）

戦闘の天才・靈夢をかつゝよく書きつつも、鬼巫女靈夢のクズつぶりも存分に書きました。

初稿になかった食事シーン追加しました。

完全に蛇足ですが推敲の勢いで書いたやつたので。

今回は十分の一の集中力で十倍の生産量を田指して書きました。
ちょっと雑でスカスカぎみかもしれません。
でも適当にやって数時間でこんだけ書けたのでまあまあ満足。
誤字脱字はかつてない量でしたが。

毎日更新はここまで。次回からは不定期更新になります。
もしかしたら別作品に主軸を移すかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7327m/>

東方スキマ合体！

2010年10月8日13時40分発行